

---

# 私は幽霊になった

冬桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私は幽霊になった

### 【Nコード】

N29350

### 【作者名】

冬桜

### 【あらすじ】

河原でゴミ拾いをして、日々をすごす幽霊の少女。  
そこに一匹の猫と一人の少年がやってきた。

## プロローグ（前書き）

始めて連載に挑みます。

短編も最近音沙汰なだったので、不安ちゃあ不安だけど一応プロットは出来てるんで最後まで書き終える予定です。

文章力が相変わらず低いですが、ゆっくりゆったりとした目で見ていってください。

## プロローグ

カンッ

乾いた空に乾いた音が響く。転がっていただけの空き缶は、今はただ宙に舞う。

蹴った当人は、落ちた先を気にすることなく通りすぎた。

「いたっ！！」

決して聞こえないだろう小さな声は、川の流れる音にかき消される。あまり大きくないその川の土手の下は手入れの行き届いていない無法地帯だ。

だから、空き缶が蹴り入れられたからといって誰かの目を引くわけでもない。

まして、それが何かに当たったなどと考えられるはずもない。

「いったいなー。つたく、これで今日もまた怪我したわけだ」

見れば、草の陰で頭を抑えてうずくまる何かがあった。

「ついてない。ついてない。あー、今日もまたついてない」

幼い声に幼い容姿。少女だと判断できる。しかし、少し普通とは違った。

半透明。

その薄く透き通った体は、本来この世にいるべきでない存在だ。

服装は今の時代とは吊り合わず少し古めかしい。

そして、背中には大きなかご。

「しかし、毎日毎日よくもまあ、こんなにゴミがでるもんだ」

さっきの空き缶を手に取り、後ろのかごに投げ入れる。

その作業はよどみなく、淡々と行われる。

また、一つゴミを拾ってかごにいれた。

「神様もいったい何をお考えなんだ？ こんな私にゴミ掃除しろだ

なんて。そのせいで・・・毎日怪我するし。ゴミはなくならないし。捨つても捨つてもなくならない。時間ばかりかかるだけで、もう何年やっつてるかわかんないし」

文句を言いながら、ガサガサと草をかき分けて前に進む。また一つゴミを捨った。

「それに・・・誰かが捨てたゴミを捨うなんて・・・。ここに捨てるぐらいなら、ゴミを作るなっつんだ。そのせいで、ずっと迷惑してんだぞ。本当ならここにゴミを捨てたやつ全員が私にお礼なりなんなりしてくれてもいいはずだ」

もう何度も言い捨てた台詞をまた吐き捨てる。

こうして、この少女の日常は進んでいく。

誰に目を止められるわけもなく。

誰に感謝されるわけもなく。

「おおっ?」

少女は急に奇妙な声を出した。

「おおー、捨て猫か。珍しいな。このへんに捨てるやつは滅多にいないからな。いたとしても、いつも中身は空っぽだったし」

小さなダンボール箱に猫が一匹入っていた。

「逃げないのかお前。ここにいってもなんもいいことないぞ。もっと人の多いところにいけば、食いもんも見つかるだろ。親切なやつに会えば、飼い猫になれるかもしれぬ」

少女は猫をゆつくりとなでる。

猫はおとなしかった。

「私は飼ってあげられないからな。見ての通り、人じゃないし。私はお前を持ち上げることさえ叶わない。できれば、別のところにいって元気に暮らしてくれ」

幽霊である少女にとって、意思あるものを動かすことはできない。

せいぜい、なでるぐらいしかできないのだ。

どうにかしてやりたいが、どうにもできない。

少女は苛立たしさを覚え、しかし、ゆつくりと丁寧に猫をなでる。

それは、他に触れ合うものがない寂しさをごまかすためだったのかもしれない。

長い時間そうしていた。

高かった太陽は次第に明るさと高度を落とし、赤く低く河原全体を焼き尽くすように、真っ赤に染め上げた。

赤い日がダンボールの中の猫を照らす。

ぴたっと猫をなでる手が止まる。

少女はゆつくりと立ち上がった。

「悪いな。さつさといったほうがいいと思うぞ。じゃあな」

そのまま、背を向けた。どこか、怯えるように逃げるように、急ぎ足でその場を去る。

その肩は震えてるように見える。

少女は無言のまま、いつもの寝る場所まで歩く。

そこは、老朽化した橋の下だった。

今にも崩れそうな鉄骨製の橋。

すぐにも取り壊されるのではないかと思えるほど、古く、そしてボロボロだった。

橋の下から見上げると黒く煤けた部分が見える。

それがまた、一段とこの橋の雰囲気が悪くしていた。

少女は、橋の下で寝転がり、体を小さく折りたたむ。

そして、目を閉じて動かなくなった。

寝息は聞こえない。

果たして幽霊は夢をみるのだろうか？

完全に日が落ち、あたりに闇が訪れる。

## プロローグ（後書き）

ひとまずプロローグ。

週一よりは早いペースで書くつもりです。

## 友達

少女の朝は早い。

ひんやりとした空気の中、今日もゴミ拾いだ。

「ふああーあ、眠い眠い。今日も晴れか。昨日の猫はどうして  
るかなー」

大あくびをしながらも、足取りは軽く機嫌が良い。

いなくなっても仕方ないけど、あともう一回ぐらいなでてや  
りたいな

そんな事を考えながら、ダンボール箱のあった場所まで急ぐ。  
少し歩くと、ダンボールが見えた。

ポロポロのダンボールが草に紛れて置いてある。

少女は自分の寢床と同じくらいポロポロだなと思い、なんとも言え  
ない気分になった。

しかし、そんな気分は一瞬で吹き飛ぶ。

中を覗き込むと少女は喜びの声をあげた。

「おっはよーい。寒かっただろ。最近の朝は冷たいからな」  
言いながら、猫の体をなでる。

「こんなポロ箱、さっさと出てった方が身のためだぞ」  
猫が小さく鳴いた。

果たして少女が見えているのか見えていないのか。

そもそも、なでられている事が分かっているのか、いないのか。

それでも、少女はなでる手を止めなかった。

猫も相変わらずおとなしかった。

「さて、行くか。じゃあな」

最後に猫の頭をポンポンと叩いてから立ち上がる。

今日も昨日と同じゴミ拾い。

だけど、今日はいつもとちょっと違う日なのかもしれない。

そんな期待とともに、少女は作業を開始した。

正午もとうに過ぎたおやつ時。

小学生は家路につく。

ばらばらと黄色い帽子が見受けられる。

土手沿いが通学路になっているのだ。

しかし、少女に気付く者はいない。

誰かに声をかけられるはずもない。

誰かに名前を呼んでもらうこともない。

第一、名前が思い出せない。

だから仮にそんな誰かがいても意味はないのだろう。

それに記憶だつて曖昧だ。

何年もここで同じ事をしているような気がするし、そんなに長いことやっていないのかもしれない。

一体いつから、ここにいるのだろう。

しかもゴミ拾いをしながら。

自分が幽霊になった時期さえわからない。

もちろん、何故なったのかもわからない。

膨大な時間が記憶を薄れさせたのかもしれない。

もしかしたら、思い出したくないだけなのかもしれない。

どっちにしろ、やることはわかつている。

少女はため息を一つつき、土手に行く小学生たちを見上げる。

見た目の年齢からすれば、自分と同年ぐらいだろう少年少女たちが楽しげに、ときに足早に帰っていく。

羨ましいかと聞かれればそうなのだろう。

でも、自分とは住む世界が違うのだ。

関わる事などありえない。





自分がどんなに頑張ってもこの風よりも無力なのだから。  
やがて、少女の思考回路が動き出した。

「・・・にしても変な服着たやつだったな。いい奴なのは間違いないが、見た目は相当怪しい」

少女はその男が学校で不審人物扱いされていることをしらない。

まして、先程の少年たちがそのせいで一目散に逃げ出したことも。とはいっても、大抵の少年はあんな服装の男にいきなり後ろに立たれたら逃げ出すかもしれない。

遠目に見ても、近づかないようにするのが懸命だろう。

「ま、いつか。それより、大丈夫だったか？」

心配そうに猫をなでる少女。

さきほどの事も相まって、それはそれは丁寧に大切に、一心になでまわしていた。

だから、後ろに気付かなかったのかもしれない。

「何してんの？」

「うわあ!!!」

少女は先程のいじめっ子？の少年たちと全く同じ台詞で驚いた。

「猫？ 捨てられたの？ 可哀想に。そうだ、いいもんがあるよ」

そういつて後ろの少年はランドセルからパンを取り出した。

驚いて固まっている少女には目もくれない。

「お腹空いてるでしょ。おー、可愛い。よしよし。はいどうぞ」

少年は猫の頭をなでながら、パンをダンボールの中にいれた。

「こんなところじゃ寒いんじゃない？ 明日何か持ってきてあげるよ。毛布？は無理そうだから、新聞紙とか」

可愛い、可愛いといいながら、ずっとなで続けている。

「家じゃ飼ってあげられないんだ。残念だけど・・・」

そこで、ようやく少女に魂が戻ってきた。

「な、な、なにしてた？」



## 友達(2)

「ゆ、ゆ、ゆー！ー！!??」

少年は慌てていた。驚いていた。

それはもう少年の短い人生の中でも一番とっていいほどの衝撃だった。

「おー！ー、もしかしておまえも幽霊か？」

ペチペチと少女は少年のおでこを叩く。

「でも、カバンしょってるしな」

今度は頭から肩、腕と順番に確かめるように叩いていく。

「それに透けてないし。ん？んー、変な奴。えいっ」

掛け声とともに少年の肩を押した。

少年はバランスを崩して後ろに倒れる。

その間も少年はあわあわとしていただけだった。

心ここにあらずという感じた。

「すげえ！！押せるじゃん。さっきのやつらは全然だったのに！！」

少女の目は輝いていた。

遊び相手という最大のおもちやを見つけたのだから無理もない。

「おい！！おまえ、名前は？」

そこで、やっと少年のターンになる。

「み、みつあき」

「みつあきか。みつあき、よく聞けよ。私は幽霊だ。名前は覚えてないし、歳もわからん。なんでここににいるのかもわからんし、一体いつまでここにいてもわからん」

少年はガクガクと壊れたように頷く。

「わからんことばかりで悪いが、一つお願いがある」

「・・・なに？」

「友達になつてくれ！！」

少女は少年に向かって頭を下げる。

「このとーりだ」

この瞬間、少年の頭の中にどれだけの選択肢があったらろう。そして少年は一つの選択をする。

断ったらどうなるのか。受け入れたらどうなるのか。

これから先どうなるのか？どうするべきなのか？

本来あるべきでない存在に関わること。

これが一体どういう意味なのか。

でも、そんな事は関係なく、ただ純粹に、ただ単純にうなずいた。

「いいよ」

ぎこちない笑みを浮かべる。

「ほんとか！！私は幽霊だぞ？それでもいいのか？」

少女は飛び上がらんばかりの勢いで喜んだ。

ソニに対し、今度は自然な笑顔をむけて言う。

「いいよ。幽霊でもここにいるんですよ。ここにいて、しゃべって

るだもん。じゃあ、友達になれるよ」

少女の笑顔を受けて、少年の気分は軽くなる。

「えっと、よろしく？かな」

「ああ！！よろしく！！」

この時、少年と少女はお互いにお互いを認めた。

少女は嬉しくてたまらないといった様子だ。

少年は戸惑いながらも笑っていた。

「なあ、またお願いしていいか？」

「なに？」

「こいつを向こうの橋の下まで運んでほしいんだ」

そう言って、ダンボールに手を添える。

「うん、わかった。けど、なんで？」

少年は何故自分で運ばないのか疑問に思い、少女は正確にその問いの意味を汲み取った。

「私は自分で運べないんだ。押しても引いても動かないし、持ち上げようとしてもびくともしない」

「そうなんだ。でも、さわられるだけでびっくりなんだけど。幽霊って何でもかんでもすり抜けるもんだと思ってたから」

「そっぴやそうか。私もなってみるまで知らなかったけど、これが普通じゃないのか？それとも私が変なのかな」

少女が真剣に悩みはじめたため、少年もダンボールを持ち上げながら一緒に考える。

「このへんに他の幽霊っているの？ いれば、それで分かるんじゃない？」

「いや、会ったこともないし聞いたこともないぞ。私はずっと一人だったからな」

しゅんと落ち込む少女。

少年はことさら明るい声を出す。

「大丈夫。僕が友達になっただから」

一人じゃないよ。

その言葉は少女に元気を与える。

「そうだな」

二人は歩き出した。

傍から見れば、それは少年が一人で歩いていただけだろう。けれど、確かに二人は並んで歩いていた。

暖かく涼やかな太陽はしっかりと二人を照らしていた。

少年は気になったことがあった。

「ねえ、そのかご何？」

「かご？ ああ、かごか。私はここでゴミ拾いをしているのだ」

「ゴミ拾い？ 幽霊がゴミ拾いなんて聞いたことないや」

少年は素直に笑う。

「むう。神さまに言われたんだから仕方ないじゃないか」

ふくれっ面で答える少女。

「神さまに会ったことあるの！？」

「あー、ない。気づいたらここにいて、気づいたらゴミ拾いをしていた。けど、こんなことさせてるのは神さまだと思う。なんとなく。そう思わない？」

「そうかも。でも、いじわるな神さまだね。ゴミ拾いだなんて」

「いいさ。あの橋の下ですつと立ってるだけってのは嫌だしな。それにゴミ拾いしてたおかげで、こいつにもおまえにも会えた。むしろ、感謝してるぐらいだ」

「そっか。じゃあ、お礼言わないとね」

「そうだな」

二人分の笑い声が響く。

こうして異なる二人の異なる世界は、ある一点でつながった。

孤独な少女が孤独ではなくなった瞬間だった。

運命が決まっているとすれば、これは決まっていたことなのかもしれない。

そして、これからも。

少し離れた場所で二人を見る人影がいた。

黒の法衣を纏い麦わら帽をかぶった金髪の男。

「やれやれ、奇抜な事もあったもんだ」

その声は幾分の楽しみを含んでいた。

「しかし、へんなやつらだな。小学生と幽霊少女が友達同士か。笑い事か笑い事じゃないのか。放っておくわけにもいかんだろうしな。・・・だが、すぐにどうにかなるわけでもない、か」

そう言つて、こんどこそ踵を返す。

「喜劇となるか悲劇となるか、神のみぞ知る。せいぜい遠くから暖かく見守ってやるさ」

だいぶ日が落ちてきた。

夕暮れまであまり時間もないだろう。

「それよりも早いところ宿確保しないとな」

ぶつぶつと独り言を言いながら歩いていく。  
その姿はどこからどうみても不審者だった。

友達(2) (後書き)

一  
段落です。

## 存在理由

学校帰りの昼下がりに。

一人の少年が帰り道を歩いていた。

周りを見渡せば、同じような背格好の少年少女が何人もいる。

街路樹は黄色の葉を散らし、味気ない灰色の道に彩りを添える。

時節吹く冷たい風が散らばった葉を巻き上げる。

葉の擦れる音と風の鳴き声が聞こえてきた。

切れた雲の合間から顔を出す陽の光が暖かい。

少年は急ぎ足だった。

まわりの流れよりも速く歩いていく。

今も小さな集団を追い越したところだ。

橋が見えてきた。

あまり大きくない川に架かったあまり大きくない橋。

この橋を渡り終わると、左に折れて川沿いの土手を歩く。

ここまでくれば、目的地はすぐそこだ。

やがて、一つの古い橋が見えてきた。

土手を降りて、橋の下へ。

「だ、誰かいますか・・・？」

さっきまでの勢いはいづこかに。

まるで何かを恐れるように、か細い声を出す。

少年は自分で自分の声に驚いた。

そして、今度はしっかりと声を張る。

目的の相手の名前を呼ぼうとし、名前を知らないことに気付いた。

「誰かー？」

「はい」

返事が聞こえる。

しかし、期待した声とは違う。

全くもって、これっぽっちも違う。

低い男の声だった。

「誰？」

疑問の声が自然と漏れる。

同時に得たいの知れない恐怖が体を包み込んだ。

「誰とはご挨拶な。呼んだのはそっちだろ？ 俺は返事しただけだぜ」

ゆらりと橋の影から男が出てきた。

黒い法衣に麦藁帽で金髪。

「え・・・」

絶句して固まる少年。

「そんな怖がるなよ。俺だって人並の心は持ち合わせてるんだ。昨日の今日で結構傷ついてるんだぜ？ 会うやつ全員、危険人物に出会ったみたいなの顔するし」

頭を掻きながら、言葉を続ける。

「おまえ、昨日のやつだろ。あの幽霊の嬢ちゃんと一緒にいた」  
「・・・」

少年は再度言葉を失くした。

動かない少年を見て、男も沈黙する。

そんな少年に救いの声が訪れた。

「おい、どうしたんだー？」

壊れた人形のように後ろを振り向く。

走ってこっちに向かってくるのは、まごうことなき昨日の幽霊少女だった。

軽快に走るその姿はとても幽霊とは思えない。

少女は走る。

残り3歩。

後2歩。

1歩。

ストンとこけた。

顔面を見事に地面に打ち付ける。

音がほとんどしなかったのは幽霊だからだろうか。

少女は顔を抑えながら起き上がる。

「痛い……」

少年と男は二人して啞然とする。

「……朝から思ってたけど、お前ドジツ娘だな」

男はしみじみとした声で言った。

少女は涙目で抗議する。

「だって……、そこらへんの石ころだって私には重いんだ。いつ

もは気をつけるんだが……」

「だが？」

「友達が危ないやつに襲われると思って、急いだから転んだ」

「まるで、俺が原因みたいな言い方だな。あと一応言っとくが、こ

れでも坊さんだ。聖職者だ」

少女は半信半疑の目を向ける。

例え坊さんでないとしても、普通の人ではない事は確かだ。

見た目も、こうして少女と会話をする事自体も。

「なあ、ぼうず。俺、そんなに危ないか？」

男は傍らにいた少年に救いを求める。

少年は痛そうに少女から目を背けると、今度は自称坊さんの男から

も申し訳なさそうに目を背けた。

「うおい！！そんな残念そうな顔して、そっぽ向くなー！！」

「ほらな。そういうことだ」

慌てる男に少女は勝ち誇った態度をとる。

「おまえも残念な中に入ってるんだよ！！」

「う、嘘だ！！適当なことを言っな！！なあ、みつあき？」

少年は考えた。

このままでは、針のむしろだと。

それだけでなく、今の状況がよく掴めない。

幽霊少女はまだいいとしても、学校で注意された不審人物そのまんなの男が一緒にいるのはどうしてだろうか。

「そ、そうだ。今日はパンと新聞紙を持ってきたよ。あの猫はどこ？」

逃げた。そして、逃げ道は正しかったらしい。二つの意味で。

「おお！！ありがとな！！猫はこっちだ」

少女は橋の下へと走る。少年はそれを追う。

「おお！！すまねえな。朝から何も食べてなかったんだ」  
自称坊さんも少年のあとに続く。

こうして、猫のもとに妙な組み合わせの3人が集った。

## 存在理由(2)

「おじさんは一体何者なんですか？」

みつあきは持つてきたパンを一匹と一人にあげたあと、おもむろに質問した。

「坊さんだ。他に言うとするれば・・・お兄さん？」

自称坊さんはもらったパンを食べながら答えた。

みつあきが何を言うべきか迷っていると、幽霊少女が言った。

「そんな自身なさそうに言っつてことは、よほどシヨックだったんだな」

「えっと、すみません。お兄さん」

即座に訂正するみつあき。

自称坊さんは何かを確かめるようにうむ、と頷いた。

「改めて言われると、結構傷つくかもしれない」

「ごめんなさい」

暗い橋の下で全員が沈黙する。

三者三様の時間がすぎる。

少年は気まずそうに、少女は不満そうに、そして自称坊さんは何かを堪えるように。

突然、自称坊さんが笑い出した。

「ははは、ぼうず。そんな謝ってばっかだと、日本人の鏡になっちまうぞ。もっと、こころ気楽に行こうぜ。こいつみたいに」

戸惑っている少年のかわりに少女が怒る。

「おまえが謝らせたんだろ!!!」

そうだな、悪い悪いと言いながらも、彼に反省の色は見えない。

「そんなにかっかするなつて。これからしばらくこの橋の下にいるんだ。毎回怒ってたら神経擦り切れちまうぜ」

「げっ、さっさとどっか行ってくれよ」

全身で拒絶を表現する少女。

少年がまあまあと少女をなだめる。

「お・・・兄さんはお坊さんなんですよね？」

「そうだ。ついでにいうとお兄さんでなくワタルと呼んでくれ。お兄さんと呼ばれるたびに、俺の小さなハートが削れちまう」

少女は全部削れて無くなってしまうと思ったが、口には出さなかった。

少年が話を続ける。

「はい。ワタルさんは何故ここに来たんですか？」

ワタルはすぐに複数の回答を思いついた。

しかし、この問は何を聞いているのか。

単なる好奇心からなのか、怪しい人物かどうかの疑いをかけられているのか、僧侶としての答えを求められているのか。

結局、当たり障りの無い無難な回答をした。

「宿なしが来る場所といえば、橋の下が定番だろ？」

「そう、ですか」

「馬鹿！！鵜呑みにしてどうする。絶対怪しいからな、こいつ」

怪しさで言えば負けてないとは思うのだが、やはり二人とも口には出さなかった。

「ところでぼつず。名前はなんていうんだ？いつまでも、ぼつずじや不便だろ」

「光彰みつあきです」

「光彰か。で、幽霊の嬢ちゃんは？」

「名前は覚えてない・・・」

落ち込む幽霊少女。

その顔は寂しさと苛立ちがないまぜになったものだった。

その様子を見て、ワタルはある提案をした。

「ユーと呼ぼう。お前は今からユーだ。光彰もそれでいいだろ？」

「え？ああ、いいですけど・・・」

「はい、決定。よろしくな、光彰、ユー」

「本人の確認ぐらいとれよ！！それに、ユーって幽霊の頭文字から

とつたんじゃないのか!!」

「なんだ気に入らないのか?　ぴったりだと思っけどな。な、光彰」  
否定はしないワタル。

「いいと思うよ?　ね、ユー?」

光彰も呼び名がないことには困っていたところだ。  
だから、呼び名を付けることに意義はない。

そんな二人に挟まれて、ダメ押しの声が聞こえた。  
ニヤー。

小さな声が鳴く。

「お前もか!!　いいよ、いいよ!!　もう、なんとも言え!!」  
二人にしか聞こえないユーの諦めの声が響いた。

夕暮れ時に影二つ。

大きい影と小さな影だ。

赤い日を受けた長い影が歩く。

大きい方はワタル。

小さい方は光彰だ。

冷たい風が吹き抜けて、周囲の草木をざわめかす。

小さい方が口を開いた。

「あの・・・」

か細い声に力はなく。

見えない何かに脅かおそされているみたいだ。

「なんだ?」

答える声は素っ気ない。

これから来るであろう質問が分かっているからだ。

もともと、二人だけで歩いているのは光彰がワタルを連れ出したか  
らに他ならない。

「ユーは何なんですか？」

「光彰はどう思う？」

問いに問いを重ねる。

光彰は顔を少し歪めながら答えた。

「幽霊だと思います。とても、明るくて元気な」

「そうだな。そのとおりだ。で、まだあるだろう？」

さらに続きを促す。

「幽霊つてもつと冷たい感じじゃないんですか？　なのに、ユーは暖かい。まるで、生きているみたいに」

言葉が途切れる。光彰の瞳は潤んでいるように見えた。

「生きているみたいなの幽霊か。悪くない表現だな。でもな、あいつは間違いなく幽霊だ。そもそも、幽霊っていうのはどんな存在だと思っ？」

「・・・分からない」

「一般には人の器を失った魂だけの存在だと言われている」

「器を失った・・・」

「そう。だがな。普通、魂つてもんは器があつてこそその存在だ。だから、魂だけ残ることは普通は起きない。けど、よほどの何かがあつたときに、その魂の残滓ざんしが残つてしまうんだ」

「残滓？」

「魂の残り滓みたいなもんか。表現が悪いのは許せ。でな、要は魂の一部が取り残されてるみたいなものだ。実際の魂には遠く及ばない。だからこそ幽霊っていうのは希薄で不気味に感じるんだよ。人であつて、人でないものつてな」

「じゃあ、ユーは魂の残り方が多かつたってこと？」

「そうなるな」

二つの影が止まる。

「そういう事だ。その泣きっ面を明日持つてくんなよ。じゃあな」  
軽く光彰の頭を叩いたあと、ワタルはそれまでと反対方向に歩き出す。

光彰はまだ止まったままだった。

## 学校

霧島小学校。

少年が通う学校。

左右を山に囲まれた小さな町の小さな学校。

生徒児童数およそ200人たらず。

年々少なくなる児童数に頭を抱えているのはどこも一緒だ。

八代光彰やしろうみつあき、小学5年生である彼のクラスは一組。

しかし、5年生が一クラスしか存在しないため番号に意味はない。

今は休み時間。

授業の間のつかの間の休息。

わきあいあいとした雰囲気の中、光彰の周りは少し浮いていた。

「しってるか？幽霊がでただって」

話かけてきたのは隣の席のやつだ。

名前は毅たけし。

分類するならお調子者といったところか。

「幽霊？」

「そう、幽霊！！幽霊だぜ！！憧れるよなー！！」

もう一つ付け加えるとすれば、少し変かもしれない。

しかし、毅の妙な発言を気にする余裕はなかった。

光彰の心は幽霊という一言で大いに慌てふためいていたのだ。

毅は光彰の顔に出た動揺の色をどう読み取ったのか、意気揚々と話を続ける。

「学校の裏に小さな神社みたいなやつあるだろ。そこで見たってやつがいるんだよ。そいつも最初は幽霊だなんて思わなかったらしいんだが、近づいてみたら向こう側が透けて見えただって。しかも、こっちを見たと思っただらふっと消えていなくなったらしいぜ。ついでに言うと、幽霊見たやつは今日は休んでるらしい」

今日休んでるのにどうやってそれを知ったのかは分からないが、既

に光彰にとって幽霊とは実在する存在となっているため、あまり驚きはしなかった。

「怖いね・・・」

そう言うと毅は得意げに笑った。

「なあ、今日見に行かないか？幽霊」

「ごめん。今日はちよつと・・・」

「だろうな。泣き虫のお前には無理だよな？」

明らかな挑発の言葉だが、光彰は取り合わなかった。

「ごめんね。今日は無理なんだ・・・」

そう言うと、毅はそつかと話を切り上げ別の席に移動する。

どうも、幽霊を見るために仲間を集めているらしかった。

一人になった席で光彰は考える。

幽霊の話なんて、今まで聞いたことがなかった。

だが、ここ最近になって急に幽霊がどうのという話がでてきた。

実際に幽霊に会ってるし、なぜか友達にまでなっている。

すっきりとしない心の中でさらに気になることもあった。

それはワタルとか言う坊さんのことだ。

まるで、タイミングを計ったように出てきた。

一体何をしようというのだろうか？

この小さな町で。

「おい！！」

急に聞こえた声に驚き振り向くと、そこに例の幽霊少女がいた。

ガタンと椅子を揺らす音が響く。

クラスの何割かが何事かと振り向いた。

どうもユ一の事は見えていないらしい。

光彰は愛想笑いを浮かべて、椅子をなおした。

振り向いた皆は、また自分たちの会話、世界へと入り込む。

「何びつくりしてんだ？ああ、こいつらは私のこと見えないらしい

ぞ

平然と机の前、光彰の正面まで移動する。

「開いた口が開いたままって言うのはこういう事なんだな」  
得心といった感じで、手を伸ばし光彰の口を閉じた。  
やっとの事で、光彰は小さな声で聞いた。

「どうしてここにいるの？」

「暇だから」

「ゴミ拾いは？」

「今日は天気悪いからな。こういう日は何もしないんだ。いつもなら、橋の下にいるんだがな。ワタルに暇だ暇だといったら、学校に行ってみるかかって言うことになってな。連れてきてもらった」  
へへと胸張りながら満面の笑みで答える少女。

なるほどなーと思いつつ、一つだけ問題点があるように思った。

「ワタルさんと来たの？」

「そうだぞ。校門前で別れたけどな。それから学校中を歩きまわったぞ。最初に行ったのは音楽室だったかな。歌が聞こえて覗きにいったんだ。こんくらいのちびっこい奴らが歌ってた」

それから、次々にどこに行った何があったとしゃべり続けた。

光彰はそれよりもワタルの事が気になってしょうがなかった。

この学校にとつてワタルは不審人物である。

そんな人物が白昼堂々学校内を歩いていたら、大騒ぎになってもおかしくはない。

まさかいないよね、と思いつつ内心は冷や汗だらけだった。

「どうした？みつあき、顔色悪いぞ？」

「そう？ちよつと心配事があつて、でも大丈夫だよ」

「そうか。私はもう少し学校を見てくる。じゃ、また後でくるからな。勝手に帰ったりするなよ。泣き虫さん」

そういつて、少女は教室を出て行った。

その頃には、教室中が幽霊の話で持ち切りになっていた。



## 学校（2）

古ぼけた廊下。

壁も床も天井も、それ相応の時間を感じさせる。

その壁には絵が張ってあった。

多くもないが、少なくとも量の絵。

それぞれの絵の下に学年クラス名前が書いてある。

風景画だろうか。

それぞれの絵には山があつたり、川があつたり、それに架かる橋などがある。

決して上手とは言えないような絵でも、確かな暖かさを感じ取れる。自分の心の中に沸く感情に戸惑いつつも、少女は歩を進める。

幽霊である少女にとって、人と同じ感情を持つことが不思議だった。暖かくて寂しくて悲しくて楽しくて。

そんな感情を幽霊である自分が持てることが不思議だった。

自分は人とは違う。

けれど、限りなく人に近いと思っている。

橋の下で感じた孤独と、みつあきやワタルとの楽しい時間。

このどちらも、偽物であるはずがないと思っている。

そう思いたい。

でも、幽霊とは一体なんなんだろう？

自分は何故こうしているのだろう？

さっき会ったみつあきは、驚いた顔をしていた。

そのときの事を思い出し、少女は笑みを浮かべる。

でも、いつまでもこうはいかないだろう。

自分はいっしか消えてしまうのだ。

音も無く、何も残さず。

展示してあつた最後の絵は、真っ赤な夕日だった。

夕日が赤く赤く地面を染め上げる。

その絵には、今までの絵で感じた暖かさは無くただ苦しかった。世界の終わりを描いているように見えてしまう。見れば見るほどに自分を焼かれてしまうような気がした。苦しいのに、しかし、少女は目を離すこともできずにずっと立ち尽くしていた。

「ねえ、そんなにその絵が気に入った？」

突然の声に驚く。

今までに聞いたことのない女の声だ。ゆっくりと振り向くと、自分より年上であろう少女がいた。ただ、この学校の生徒には見えない。小学生というより中学生に見える。

実際、服は私服ではなく制服を着ていた。

そして、身長も高い。

長い髪が印象的だった。

「あれ？ そんなに驚かなくても」

相手はそう言うと、ユーの隣まで移動し、絵を覗き込む。

「夕日？ きれいなね。ただ、ちょっと雑かしら」

そして、ユーの方に向き直る。

ユーは言葉が出なかった。

なぜなら、その少女も透明だったのだから。

太陽の光は少女を通り抜けて、廊下を照らす。

少女はクスツと笑った。

無邪気な笑顔だった。

「初めまして、奈津美といます。よろしくね、ユーちゃん」

ユーはやつとこのことで声をだす。

「・・・ああ、よろしく」

「そんなに怖がらないで。何もしないから。まだ何もしないという方が正しいかしら」

奈津美はまた笑う。

「今日はね、ちょっと忠告にきたの」

ユ一は本能的な恐怖を感じ、一步後ろに引いた。

「何か文句あんのか？」

怯えた声には、いつもの覇気はない。

「そう。文句を言いに来たの。まあ、その前に一つ聞きたいのだけれど、あなたいつからこの世にいるの？」

いつ？

ユ一は記憶はおろか名前すら覚えていない。

何も覚えていないのだ。

だから、いつ幽霊になったかなんて分かるわけがない。

「知らない」

はねつけるように短く答える。

「そう、ならいいわ。あつ、そうそう。もう一つ聞きたいことがあったわ。あれ、あなたの知り合い？」

言って、少女は窓の外を指さした。

その先には相変わらずの麦藁帽をかぶったワタルがいた。

「そうだ」

ユ一はこれにも短く答える。

「やっぱり。余計なことしないでいいのに……。まったくどこか剣呑な雰囲気を漂わせる少女。」

ユ一にとって、この少女は恐怖の対象でしかなかった。

自分と同じ幽霊のはずなのに。

けれど、自分と同じとは思えなかった。

何かが違う。そして、どこか怖い。

もう一度窓の外を見れば、ワタルがこちらを睨んでいた。

「邪魔される前に言うこと言っとかないとね」

奈津美はコホンと咳払いを一つ、さっきまでとは違う脅すような声音で言った。

「あなた、あんまり出歩かないでくれる。邪魔よ。というかさっさ

と消えてちょうだい」

ユーの顔がピシリと固まる。

同時に奈津美の姿がスーツと薄くなっていく。

「あなたが原因で皆が騒ぐの。言うこと聞かないなら、無理やりにも還すから。覚えといて」

言い終えると、奈津美の姿は消えた。

そして、ユーはまた一人になる。

窓の向こうでは、ワタルが走って逃げていた。

どうも誰かに見つかったらしい。

それを見て思う。

自分もどうやら追われる立場になったらしい、と。

### 学校（3）

午前の雲はどこへやら。

午後の授業が終わる頃には空は青一面となっていた。

外で遊ぶには絶好の天気である。

そんな中、誰もいなくなった教室で光彰は一人座っていた。

ユ一の去り際の一言を律儀に守っているのだ。

しかし、いくら待ってもユ一はこない。

実際は幾程の時間も経っていないが、待っている時間というのは往々にして長く感じるものだ。

光彰は探しに行くべきかここで待っているべきか迷っていた。

今探しに行けば、入れ違いになっってしまうかもしれない。

けれど、ここでじっとしているよりも探しに行った方が良いかもしれない。

さんざん考えたあげく、結局探しに行くことにした。

カバンを背負い椅子を正す。

教室の後ろの扉に鍵をかけて、教室を出る。

まず、どこを探そうかと考えてその必要がないことに気づいた。

廊下の奥の方で透明な少女が立っている。

今にも消えてしまいそうな少女。

陽の光を透過するその姿は、幻想的だった。

そこに在るはずなのにそこにいない。

全ての光は少女を素通りしていく。

天の恵みを受けられない、天から見放された存在。

しかし、少女は天を見上げ祈っているように見える。

決して届かない祈りを捧げているように見える。

光彰は声も出せずに立ち尽くした。

声をかけることも、近づくこともできなかった。

しばらくすると、ユーがこちらに気づいた。

「みつあき、授業は終わったのか？」

言いながら、かけてよってくる姿にさっきまでの雰囲気はない。

光彰は微笑みながら答えた。

「さっき終わったよ。これから帰るところ」

「そつか。でも、みつあき。．．．なんで、泣いてんだ？」

光彰は言われて始めて、自分が泣いていることに気づいた。

「あれ？　なんでだろ」

袖で目元を拭う。

「ほー、泣き虫つてのは間違いじゃないな。突然泣き始めるんだから」

うんうんと頷きながら一人で納得するユー。

「えーと、泣き虫は間違つてないんだけど．．．。さすがにいきなり泣いたりしないはず．．．。なんだけど」

突然のことに戸惑う光彰。涙は止まったみたいだ。もう一度、目元をぐしぐしと擦る。

「全然説得力ないけどな。それ」

「そだね。．．．とりあえず、帰ろうか」

「ああ、そうしよう」

二人並んで歩き出す。

ほとんどの生徒が帰ったため、校舎はとても静かだった。

「ねえ、ワタルさんは？」

「ん？　あいつならさつき走つて逃げつたけどな」

「逃げていった？　先生達にでも見つかったのかな」

先生に見つかっていたら、集団下校とかにはなっていない。でも、今日は集団下校とかにはなっていない。

けど、他に逃げなければいけない相手は思いつかない。

「さあ、誰から逃げてたのかは見えなかったしな。そんなに気になるか？　あれのこと」

「あれって．．．。ワタルさん、大丈夫かなあ？」

「心配しても損するだけだぞ」

大丈夫だと言い切るユ一。

その様子に光彰も考えることやめた。

「大丈夫ならいいか。そうだ、ユ一。その後、何してたの」

「絵を見てた」

「廊下にあつた6年生の絵のこと？ 気に入った絵、あつた？」

その質問にユ一の顔が曇る。

「いや・・・なかつた」

「そう・・・なんだ」

黙つたまま、ゆつくりと階段を降りていく。

横目に見たユ一の降り方は軽やかだった。

ふわつと身体が浮いたかと思うと、そのままゆつくりと着地する。

光彰のように一歩一歩降りるのではなく、スキップでもしているみたいだった。

そのまま階段を降りきつて、下駄箱に向かう。

古びた靴箱。見える範囲で外靴の入っているのは、光彰の分だけだった。

「なあ、あの時計・・・」

「時計？」

靴を履き替えながらユ一の指差す方向を見る。

そこにあるのは、大きな木製の時計だった。

丁度、学校から帰るときに見えるように配置された時計。

文字盤には12個の数字の他に名前が刻んであった。

寄せ書きのように時計全体を覆い尽くす名前。

「卒業制作だよ。この学校を卒業するとき、皆で作って学校に残すんだ」

「残していく・・・。いなくなるのにか？」

「たぶん、いなくなるから、かな。僕はまだよく分からないけど」

ユ一はじつとしていた。

何を思ったのか。

何を感じたのか。

消えぬ物と消えゆく者と。

「・・・いいな。そういつの」

「うん」

光彰が靴を履き終えても、ユ一はまだ見上げていた。

「帰ろう」

横に並び声をかける。

「ああ」

短い答え。

二人は歩き始める。

日の差す外へと。

多くの卒業生に見送られながら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2935o/>

---

私は幽霊になった

2010年11月12日09時30分発行